

きりたての前髪
風になびかせて
たるとたたんのようなきゅうじつ

さいう 石川県

髪を切るという行為は、日常と非日常のはざまにあるのかもしれない。たとえば入学式前に、散髪に行くように。そこには、ちょっとしたきっかけがあって、それは小さな決意表明にも似ている。この作品の語り手は、切りたての髪を風になびかせて登場する。

そこから「たるとたたんのようなきゅうじつ」までの落差がおもしろい。神話のなかの人物に訪れた、おだやかな休日を連想させる。

音域の届かないミモザになるの

松下 誠一 東京都

音域には可聴域と非可聴域があるけれども、届くとか届かないとかの水準で表わされることはないと思う。だから表現としてはおかしい。でもその違和感こそが、この作品の中心にあるのだと思う。「音域の届かない」という一節で、音自体と隔絶してしまった、まっさらな世界が表現される。軽い語り口だけれども、せつない。

赤べこのちいさくゆれて風光る

金光 舞 埼玉県

赤べこというのは、福島県の赤い牛をかたどった張子のおもちゃ。最後に置かれた「風光る」にすべてが集約される。その輝きは、きっと未来の希望へとつながるに違いない。

ウィスキーを注ぎ氷のラララ

奎いう子 佐賀県

ウィスキーの CM に出てきそうなフレーズ。多忙な日々における、ひとときの安息を思い起こさせる。ラララは、溶けた氷が立てる音だろうか。

ゆびさきを思い出すほど溶けてい
く雪のあなたは盲目だった

雲理そら 大阪府

ドラマチックな行為は、その極端さのせいで、どこか滑稽で悲劇的な印象を与えるけれど、語り手は、あえてその渦中へ飛び込もうとする。まるで救いを求めるように。ここでの「あなた」は、あこがれの対象であるとともに、決して届かないものとして描かれているようにも見える。

トライアングルの
余韻にくすぐられ
春はやさしい積み木と思う

常田 瑛子 山口県

日々の安息のひと時を詠ったものだろうか。こんなやさしい歌を詠えるひとは、それと同じくらいの痛みや残酷さと向かい合ってきたのかもしれないと思う。春がやさしい積み木になるまでの時間。それは決して短いものではなかっただろう。

風船にそっと指紋を奪われて

檜野 美果子 宮城県

指紋は個人を特定する有力なものだから、それをうばわれるのは、おそらく名前をうばわれるのと同じくらい大きなことに違いない。けれども作品からは、悲壮感というより安らぎが伝わってくる。「風船にそっと」という一節によって、名前の付けられる以前の世界の調和のなかに、自身もまた置かれていることに気付かされるのである。

バターを切り分ける

パンに塗る

バターの残りを冷蔵庫にしまう

すこし泣く

白鳥 陽太 神奈川県

改行がとても効果的な作品。「すこし泣く」というのが結論なんだろうけれども、そこにたどり着くまでの、食べるまでの行為がこの作品を支えている。きっと僕たちは、一生忘れられないようなことでも、次の日には忘れることができる。それは、食べたり寝たりといった、生きていくためにしなければならないことのくりかえしが、忘却を許してくれるからで、書き手は、そのことを痛いほどわかっているのだ。

死亡したと聞いた日の

とてもあかるい陽のようだった

村上 すう 長野県

誰かの死を知った日の驚きと、落ち着かない感じを上手く表現している。あまりに衝撃的な事実、時に記憶そのものをあいまいにするのかもしれない。「とてもあかるい陽のようだった」という一節が、それを物語っている。

ケーキ・サレ

数日分のつくりおきするとき

未来は鮮明になる

小川 未優 石川県

たったひとつでも明日することを思い浮かべられるなら、それが救いだと思う。そんな気持ちをかたちにしたら、こうした作品になるのかもしれない。「未来は鮮明になる」という一節が美しい。